

2024年度

カウンセラーコラム

1

芽が出るタイミング

岡田 カウンセラー

今年の夏はまさに「猛暑」。本当に厳しい暑さでしたが、みなさん、いかがおすごしですか。本格的な秋の深まりはまだまだで、植物も少々疲れ気味のようにも見えますが、緑豊かな学内を歩いていると、植栽が折々に季節を感じさせてくれます。

秋といえば、みなさんは「ひっつき虫」と呼ばれている植物を知っていますか（正式には「雄（お）なもみ」。「なもみ」は、「ひっかかる」という意味の、「なずむ」という言葉に由来しているそうです）。マジックテープ開発のヒントにもなった、特徴的なトゲのある実がなる植物で、実が服に簡単にくっつくので、そのように呼ばれています。昔は草むらでよく見かけたもので、子どもの頃に実をくっつけあって遊んだりしたのが懐かしく思い出されます。皆さんの中にも同じ経験のある方はおられるでしょうか。

中身にまで関心を向けたことがなかったのですが、実を割ると、少し大きなものと、少し小さなものの、大小二つの種が入っているのだそうです。大きな種は、すぐに芽を出し、ぐんぐん大きくなることができ、小さな種は、時間をかけてゆっくり芽を出します。一つの実の中に、異なる二つの個性が同居しているのです。

そう説明を聞くと、大きな種の方が頼もしそうですが、自然環境下では、日照りなど多様な状況にさらされるため、すぐに芽を出すせっかちさが裏目に出ることもあり、そういった局面では、のんびりタイプの小さな種が力の見せ所となるようです。

大小の種は対照的な二つの個性ですが、実の中での単なる同居の関係にとどまらず、互いを補い合いながらそれぞれの力を発揮し、野を生き抜いているのです。

スピードや合理性が求められる今の時代、私たちもつい影響されて判断が早急になるのか、大きな種のようなわかりやすい性質を、高く評価しがちになる一面があるのかもしれませんが。こういった植物の生き方からは、そのような表面的な観点とは異なる、興味深い世界が垣間見え、眼差しを深くさせられます。

人の個性や歩みも実は同様なのかもしれません。「せっかちでやるのが速い」種も、「のんびりしていてじっくりことをなす」種も、どちらが優れているかというのではなく、長い目で見ていくと、それぞれの持ち味としての良さが、じわりと感じられてくる、そういうものかとも思うのです。

新年度開始から半年。“前期にもっとこういうすごし方が出来たらよかったのになあ…”と、不本意な気持ちになることがあっても、これから、これから。少しずつ自分の身になじむもの、自分らしいものを見つけていければと思うのです。

「雄なもみ」の生き方からわいてくるイメージが、力をくれることを願っています。



【引用・参考文献】 稲垣栄洋著『身近な雑草のゆかいな生き方』草思社



「雄なもみ（ひっつき虫）」